
白夜叉再臨

朝露詩奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜叉再臨

【Zコード】

Z9221Z

【作者名】

朝露詩奈

【あらすじ】

佐幕とか攘夷とか、しみつたれた武士道になんて興味ない。ただ、己の守るもののために刀を振るうのみ。かつての白夜叉としての自分を封じ込め、万事屋として呑気に働く銀時が、再度白夜叉が刀を振るうとき、地球はどうなる？

「ある依頼人」がきっかけで、再び白夜叉として戦うことを決意した銀時。そんな彼を巻き込む、大事件とは。

第零訓 白夜叉降誕（前書き）

まずは、お決まりのあのシーンから始めよう。

第零訓 白夜叉降誕

冷たい雨が、2人の男の背に突き刺さる。不吉な厚い雲で覆われた空は太陽がとうに姿を消し、あたりを灰色で埋め尽くしていた。

「はあ……はあ……はあ……」

長い黒髪の男が、刀に寄りかかるように座り込んだ。それに続いてもう1人も、彼に背を向け、膝をつく。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸はなかなかおさまらない。頭から出ている血が頬を伝い、口に流れ込む。生臭い鉄の味が、口の中に広がった。

彼は顔をぐいっと上げ、薄闇にかすむ視界の向こうを睨んだ。無数の、赤く妖しい光が、四方八方から彼を睨み返してくる。

みな、敵の目だ。

「……これまでか」

八方塞がり。逃げ道はない。

「敵の手にかかるより、最後は武士らしく、潔く腹を切ろう」

観念して、彼は刀を抜いた。今まで、幾人もの敵から彼を守ってきた、ぼろぼろの愛刀だ。彼はその柄を両手にしつかり持つて、腹に向かた。

しかし、いざ、と刃を押し込もうとしたとき　もう一人の男が、すつと立ち上がった。

「バカ言つてんじやねーよ。立て」

その男は刀を抜き、大胆にも、立ちはだかる敵に向かつてずかずかと歩いていく。

「美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きよう
じゃねーか」

低く小さく、しかし確実に大きな決意を秘めているその言葉に、心が揺さぶられた。

自分の腹に突き刺そうとしていた刀を、目前の敵に向かってかざしながら、立ち上がる。

2人、背中合わせになつた。

「行くぜ、ヅラ」

「ヅラじゃない、桂だ」

短くそつ言葉を交わしたあと、彼らは互いには目もくれず、ただ友の背中を信じて……まっすぐに、敵中に突っ込んでいった。

その男、銀色の髪に血を浴び。

鬚の男、桂は当時の戦友のことき、そう振り返る。

戦場を駆けめぐらす姿は、まさしく夜叉。

第零訓 白夜叉降誕（後書き）

大丈夫なのか、自分。

受験の時期に、なぜこんなことを！？

えーと、普段は沖神専門の私が、頑張つて劇場版を意識した話を書
こうと決意しました。

更新は遅くなると思いますが、どうか付き合ってくださいませ。

第一訓 美人つてただ立つてるだけでいいよね（一）（前書き）

さて、と。

最初の辺はやつぱりギャグありで、それからだんだんシリアスに…
…が銀魂スタイルですよね。多分。

よし書いハ。

第一訓 美人つてただ立つてゐただけでいよな（一）

じめじめと雨が降る、インテイ・ペントンスターの朝。

「おはようござまーす」

万事屋の従業員 　といふと聞こえはいいが、実際はただの雑用・ツツコミ役以外の何でもない物悲しい少年、志村新八は今日も元気に出勤する。

「おー、新八か。入れ入れー」

朝っぱらから低すぎるテンションと低すぎるノリで、苺牛乳のストローを加えながら手招きする銀時。その隣では、神楽が酢昆布をくつねやくつねやと歯みしめてくる。

9

「いや…あのや、苺牛乳と酢昆布の匂いが混ざって、空気がすごいよどんでるんですけど…」

「気にしないのが一番ネ、新八。これが万事屋のアロマアル」

「うそ、違うからね。こんなアロマが充満してたら、誰も来ないかよどんでるんですか…」

新八は一通り突っ込んでから、ソファに座り、茶を入れた。

「それで銀さん、来月の生活費どうあるんですか？このまま依頼來

なかつたら、食べてけませんよ」

彼は銀時に声をかける。

すでに五月も下旬、であるにもかかわらず、今月の収入はゼロ。家賃すら払えないかもしれないのに、銀時と神楽に緊張感というものはほとんど見受けられない。

「大丈夫ネ。世の中、みんな何とかなるようटてきてるアル」

「そーだぜ新ハ。今までだつてなんだかんだ言いながら乗り切つてきたじやねーか、この漫畫も。何度打ち切りの危機に陥つてきたことか」

言ひながら銀時は、じろんとソファに横たわる。ますます不安を募らせる新ハ。

「てか、その打ち切りの危機を脱することができたのは編集部の努力のおかげですからね！アンタら何も努力してないじゃないですか！これじやあ、いつまでたつても貰ひ暮らしですよ」

しかし銀時は、いつものことながら、新ハの忠告をむりと無視。

「あーあ、何か面白いことねーかなー。例えばよ、オメー。玄関開けたら裸の美女が立つてたりとかしたら、一発…」

「その前に、アンタの頭を一発殴りたいですね」

新ハは冷ややかに言い放つた後、酔昆布の空き箱で巨大な城を作つてゐる神楽に向き直つた。

「それと神楽ちゃんも！酔昆布だつて、いくら単価が安いつたつて、そんなたくさん買つたら大赤字だからね！空き箱だけで要塞できるし！」

「ふーつふつふつふ。悪の帝王の孫娘の婿のいとこの飼つてる犬のおもちゃになつてゐるダメガネをやつつけるには、これくらいの設備が必要ネ。覚悟するアル新ハイイ！…！」

神楽が傘を掲げ、「突撃！」と叫ぶ。すると即座に、定春がキバをむいて新ハに突進してきた。

「あやああああああ！」

定春に噛みつかれた新ハは、頭部から血を流しながら断末魔。やつとの思いで巨大犬を振り払い、「どんだけ大掛かりなボケかましてんの神楽ちゃん！」と声を荒げるが、神楽はへらへらと笑つている。

「駄目だ…」なんなんじや、来月はホントに飢え死にだ…」

げつそりする新ハ。その横で、銀時もさすがに思いつめた顔をしている。ああ、やつと真剣になつてくれたか…と新ハは思ったが、

「やつぱな…」いつ、シチュエーションとしては、全裸のなまめか

しき女が「ひへ…」

などとこゝの銀時のつぶやきを聞いて、余計に深いため息をついた。
その時。

ピンポン、と軽いチャイムの音が響いた。

「ん?…カモが来たか」

待つてましたとばかり、銀時は起き上がりついそそと玄関に向かう。

「いや、来客のことをカモだなんてそんな

いい加減にしてくださいよと言おうとした新ハは、しかし言葉が途切れてしまった。

銀時が開けたドアの向こう…そこには、ほぼ全裸でタオルだけをはおった若い女が立っていたのだ。

全身びしょぬれで傷だらけ。肩まである茶髪からは、血の混じった水が滴っている。

沈黙の時間が流れた。

そして時計の秒針が一周半ほどしたとき、銀時がついに静寂を破つた。

「あのー……そういうフレイならどうかよそでビーリング
つてオイイイイイー……違ひでしょ、なにかよっぽじあつたんで
すよー事件とか！」

新ハガ顔を赤くしたままあわてるが、銀時はただ鼻をほじつてい
る。

「あー、そういうアレか、あの、初めての　ピー　が無駄に痛くて
ベッドを転がりまわつたつていつ…」
「傷だらけになるベッドってどんなのー？」
「きつと、切りたての丸太でできたやつアルよ
「どこの民族？」

新ハは、同僚が次々にボケを連発していくことに罪悪感を感じつ
つ、おずおずと女を見た。
残りの2人も、とりあえずは落ち着きを取り戻す。
そして次の瞬間　女が突然、どこに忍ばせていたのか、包丁を
取り出した。

「……」

第一訓 美人つてただ立つてるだけでいいよね（一）（後書き）

この調子で行つたら、完結までに100話突破しそうで怖いです。

でも大丈夫：なんとかなるわ。きっと……。

美人ってただ立つてるだけでいいよね（2）（前書き）

今日、遅めのクリスマスプレゼント貰いました。

それはなんと、自分専用PC!!

よっしゃ、これでもっともっと小説が書けるー！

美人ってただ立ってるだけでいいよね（2）

「……」

万事屋メンバーが、そろつて体をこわばらせる。

しかし刃先が向けられたのは彼らではなく、彼女自身の胸だ。

「……いいわ、死ぬわよ……」

銀時が、ほうっと息を吐きだした。

「あはは。新八、俺ビックリしたぜ。殺されるかと思つたもん」「ですよねー銀さん。ははっ、いきなりあんな物騒なモノ取り出するんですから」

「なーんだ、ただの自殺願望者アルかー」「つて……」

3人、もう一度女を見る。

彼女は深呼吸し、包丁をいまにも胸に突き刺そうとしている。

「やめろオオ！！何があつたか知んねーけど、人んちで死ぬのはやめよう！」

「そうですよ！てか、いや、まず命は粗末にしないでくださいー！」「故郷に捨て置いてきたパピーのこと、思い出すヨロシーー！」

口々にワーワー、ギャー、ギャーと叫び、なんとか自殺を阻止しようとするトリオ。女は、かなりびっくりしたように彼らを見たが、すぐには険しい顔になつた。

「関係ないわ、最後の頼みの綱のあなたたちに話を聞いてもらえないんだもの……もう死にたい！」

「いや、分かった！俺らが悪かった！話題くから、ついでに最新号のジャンプあげるから死なないでよ！」

銀時が意味のわからないことを絶叫しながら床に頭をこすりつけ
ると、女は素直に包丁を下ろした。そして先ほどまでとは打って変
わって、やわらかな微笑みを浮かべる。

「あら。ジャンプくれるなら、皿洗はやめておきますわ」

「いや……ジャンプで引き下がるって、アンタの命どんだけ軽いん
ですか……」

新八が半眼になつてツッコむと、女はとたんに唇をキッと結んだ。

「いいわ。私、死

「なないでくれよな」

銀時が彼女からすばやく包丁を取り上げ、新八に命令。

「オイ、すぐ服もつてこい

「はい」

新八は奥に引っ込むと、ものの3秒でTシャツと短パンを持って
きた。かぶき町マラソン大会でもらった、新品だ。

「どうぞ！あの、そこ、廻りますんで、着替えてください。あ、

ホント、申し訳ないですけど、あの、下着はなくて、えっと…」

女の機嫌を損ねたら大変だと、じどうもどろ廁の場所を説明する新ハ。そんな彼に、女はにっこりと笑いかけた。

「結構よ。どうも、ありがとう」

女は一礼すると、タオルを翻して廁に入った。それからすこしへて、がちゃりとドアが開く。

「お待たせしたわね」

大人びた口調でそう言つ彼女の美しさに、万事屋3人は息を呑んだ。

濡れた髪にほのかにまとわせている色気に、銀時の喉がごくりと上下する。

そして、次の瞬間。

「ひどいわ…ひどすぎるー！」

大声とともに、女はぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「こんな扱い……虫けらみたいな、この扱いつて…私に、死ねって言つてるの？暗にそう言つてるのね！」

言つや否や、再び包丁を 。

「つてちょっとオーサツキ銀さんが預かっただはずでしょその包丁！

なんで！何で持つてるんですか！」

「かまわないでちょうどいい、もう私には…あなたみたいな男…」

肩を震わせながら、彼女は自分の首に刃を当てる。

「いや、だから！分かれたカップルみたいなコント、しなくていいですか～！」

つばを飛ばす新ハ。彼をなだめるように背中をぽんぽんと叩くのは神楽である。

「まあまあ、新ハ。女は出会いと別れを繰り返して大きくなるものネ」

それに続いて銀時も、「そーだぜ、女ってのはなア、自殺しちまいたくなるほどの失恋を通して、大きくなるんだ。……乳が」

などと言つ。

「乳つて何で…?ビンだけ欲求不満なんですか」

新ハは疲れた目で銀時を見てから、女に向き直つた。

「あの、…確かに下着なしつて、そんな扱い僕らだって申し訳ないと思つてはいるんですけど……でも、自殺だけは」

「…そんなんじゃないの」

彼女はかぶりを振り、真っ赤に泣き腫らした目で新ハを見た。瞳には、深い悲しみ、そして、言葉では表現しようのない絶望が渦巻いている。

「そんなんじゃないのよ、私は、私はね……」

青紫色の唇から、憂いを帯びた吐息と嗚咽が絶え間なく漏れる。沈みきつた空気が、彼女の周りを満たしていく。

「おい、ネーちゃんよ。んな辛れ一話なり、無視に疠れなんて言わねエよ。ただな…命は無駄にしちゃいけねエ」

銀時が、静かで、それでいてよく通る声で、女を諭した。

「な? 無理に言つ必要はねエから…」

「…………。ちやんと、言わせていただきわ」

女は数秒の間を取つた後、意を決したよう、元気、いつ告げた。

「このTシャツ…」サイズよ!私、そんなにテープに見えるかしら?
?ひどい!」

「いや知らねエよー何その小さすぎる恼み!」

即座に切り返す銀時。しかし女いわく、

「小さくなんかないわ、大きすぎるのよ!」

「大きいつて何だ。それ恼みのサイズじゃなくてTシャツのサイズ
だろ!」

「そうよ、Tシャツが大きすぎるのよー屈辱よこれは!」

「それだったらノーパンのほうが屈辱なんじゃねーの!?」

「いいえ、Lサイズのほうが屈辱よ。死ぬわよー!」

「あつそ、じゃあ勝手に死ねや」

「つひオイイイイー銀さん何言つてんの!死なせないでくださいこよ

!」

馬鹿なやり取りを繰り返したあと、銀時はふはーっとため息をついた。

「んで? とりあえず、アンタが依頼入つてこつたな

「はい」

彼は女をまじまじと見詰めながら、おもむろに神楽にこうひじた。

「例のあれ、持つてこい」

「はいアル!」

神楽は、戸棚のほうにトタトタと駆けていく。

「例のあれって何ですか?」

新ハがたずねるが、銀時は無視。

「僕だけハブか……」

悲しそうな呟きも、無視。

うなだれている新ハと、罪の意識もなく平然としている銀時のところに、神楽が戻ってきた。

「銀ちゃん、これでいいアルか?」

手にしているのは、1枚の書類。

「おー、それでよし。んじゃ、まあこっち来て、必要事項を書いてくれ」

銀時は女にソファを勧め、向かい合つて座った。新ハと神楽も、その横に腰を下ろす。

「これが、依頼申込書だ。名前と住所を、この欄に
「はい」

申込書なんてあつたっけ？」と新ハは思つたが、ここには黙つておいた。銀時は説明を続ける。

「そして電話番号とメールアドレス、生年月日。あとは……ここに、
バスト・ウエスト・ヒップ」

と、ここに新ハは我慢できずツッコむ。

「ちょ、銀さん！何考えてんの？一発殴つていいですか？一発いい
ですね！」

「駄目だ、テメーは一生童貞でいる」「
一発つてそつちじやねエ！」

銀時と新ハが軽く言い争つているその横で、女はとこつと、

「なるほど、ここにスリーサイズを。B…89。W…58。H…
「何で鶴呑みにしてるんですかアナタ」

「あら……書かなくていいの？」

「当たり前でしょ。お名前と依頼だけしていただければ、仕事しま
すから」

良心的な新ハが言つと、銀時が舌打ちをした。「空氣読めよバカ」とその口が言つてゐるが、対して新ハも、「アンタこそまじめな商売してくださいよ」と無言で反論した。それはともかく。

「……私の名前は、竹中蘭冥、歳は24。あなたたちに依頼したいの

は、弟の搜索よ

美人つてただ立つてゐるだけでいいよね（2）（後書き）

自分のPCがあるつて、いいですね
気分がいい。執筆も止まらない！！

あ、それと蘭冥って、「らんめい」って読むんですよ。
戦国時代に活躍した竹中半兵衛さんをもじりました^_^

美人ってただ立つてるだけでいいよね（۳）（前書き）

あけましておめでとうございます。

えと、街明かりが華やかです。
こないだ手術を受けましたが、エーテル麻酔はあんまり好きじゃあ
りません。

午前2時ぐらいにはもう寝てました。
たまの首が取れる夢を見ました。

以上、頭が壊れかけた前書き。

美人つてただ立つてるだけでいいよね（3）

「…私の名前は、竹中蘭冥、歳は24。あなたたちに依頼したいのは、弟の搜索よ」

「搜索？」

万事屋の3人が、声をそろえる。女 蘭冥は、うなずいた。

「そう。1週間前から弟が失踪して、帰ってきていないの。家に残つてたのは、『搜さないでください』というプラカードだけ。搜すなとはいつたい何を搜すなつてことなの？その何かを搜してるとて、私が搜してはいけないものを搜してしまつてているのだとしたら、それを搜す人を捜さないといけないんだけど、その捜す人も捜してはいけないのだとしたら、捜す人を捜す人を捜す人を……」

「もういい。黙れ」

銀時が面倒くさそうに蘭冥を制し、新八も「何、捜さないでください地獄に迷い込んでるんですか」とツッコむ。「ていうかそれ、エリザベスのときと同じパターンだよね」

「とにかくー弟はね、私に『さよならイオネル』の一言も言わず、行つてしまつたのよ！」

「何か…設定が……」

新八は頬を引きつらせたが、「作者が切羽詰つてるときにはよくあることね」と神楽に言われ、口を開ざす。蘭冥は話を続けた。

「私たちね。幼いころに流行り病で両親をなくして、以来ずっと貧

え暮らし。……だけど、弟は頑張ってくれたわ。心臓病をわざわざしている私の医療費を稼ぐため、連日連夜働いて。それがきっと、とても大変で、負担だったのね。だから、家出なんてこと

「……」

銀時は、真剣に話を聞いている。新ハと神楽など、もうすでに唇をかみ締めている。

「私ね、弟に、もう一度だけ会いたいの。帰つてこいとか、働けとか、そんなことを言いつつもりはないわ。ただ……あなたのお姉さんなのに、何もしてあげられなくつてごめんねって、謝りたいの。……それだけ」

蘭冥が、深々と頭を下げる。

「見てのとおり、私はさつき追いはぎに襲われて。払えるお金なんて、もうどこにも持つてないわ。だけど、どうか手伝つてほしい。……弟を探し出すことに成功したら、そしたら……そうね、私を遊郭に売つてちょうだい。病気のことを黙つてれば、こんな私だけど、きつと買ひ手ぐらいいるはず。そのお金を、あなた方に代金として支払うわ。……受けてくださる?」

遊郭に売られてもいい。どうしても、弟に会いたい。

無垢な姉の、重い決意が感じられる言葉だった。

銀時は目を閉じた。

「よし。IJの弟思いの姉ちゃんの依頼、受けたやうにじやねか。

なあ神楽」

彼がうつむいたとたなずくと、

「やつアルな銀ちゃん!」

神楽もすっくと立ち上がった。

そんな2人を見て、蘭冥は瞳を潤ませる。

「ありがとう万事屋さん……そして、神楽ちゃんも」

「私たちに任せると、蘭ねーちゃん!」

「うふ、頼もしいわコナン君」

蘭冥、銀時、神楽の3人が楽しそうに談笑しているその横で、袁新ハは1人肩を落とした。何で僕、いないのと同然の扱いなんですか?……そう目線で訴えるも、効果はなし。

「んじゃ、いくか神楽。あ、蘭冥はここで待つてくれよな。心臓、悪いんだろ」

「どうも。……でも私も一緒に歩いて、弟のこと、いろいろお伝えしなければ搜せないでしょ?お言葉に甘えてばかりではいけませんし……」

「……ノーパンで行くのか?」

銀時が、少し眉をひそめた。怪我もしているのだし、万事屋で休んではどうかと再度提案するも、彼女は断固として首を振った。

「私も連れて行つて。私だけのうつむいて、あなたの方の手を煩わせて申し訳ないわ」

上田遣いの蘭冥に、銀時もタジタジ。

「そーか。じゃ、無理しねーよつにな

銀時は蘭冥の肩に手を乗せ、神樂を引き連れて玄関を出る。そして新ハはといふと。

「あのー銀さん。僕は……？」

すると銀時は、何かを思い出したようにポンと手を打った。

「ちょ、僕のこと忘れてたんすか

「うん」

「さらりとぬうなよ！ 傷つくんですけどー。」

「お前の仕事な、アレだ。あの、自宅警備」
キメ顔を作り、親指をぐつと立てる銀時。

「あー、はいはい……」

なるほどね、自宅警備。

新ハは、心の中でうなずいた。

うん、いいんぢやない？ だつて大事な役目だもんねそれ……つて、

「格好よさげに言いますけど、ただの留守番じゅーかアアアー！」

本日最大の、新ハの魂の叫びがこだました。

「そんなん、鍵かけときやいいでしょ？ 何でさつきから僕だけハブ
！？」

だが、ワーカーとまくし立てる新ハを横目で見やりながら、銀時は鼻をほじる。

「いいか、心のメガネを光らせて不審者をとつ捕まえるんだ！」

「心のメガネって何。僕の心は無機物なの？」

「つむせーと新ハ。メガネはメガネらしく黙つとくアル」

「つーかお前らインティペンデンスティーの憂を晴らししてただけだろー？」

「違うネ、女の子の田川」

「男性読者の方々に謝れエエー！」

それから数分間、ボケとツツ「ミミ」の連鎖は続き、なんやかんやで、新ハは留守番もとい自宅警備をすることになった。なつてしまつた。

「本当ですよね。本当に、僕ここにいたら、来週から昇格させてくれるんですね」

「本当だ。今日お留守番してるだけで、テーマはツツ「ミミメガネキヤラを卒業できるんだ。ありがたく思え」

「いいよに言いくるめられたとしか思えない状況だが、新ハは新たな未来への希望を胸に、要求を呑んだ。だまされたという表現のほうが、「」の場合は適切なのかもしれないが。

「じゃ、こつてらつしゃい！」

新八が手を振ると、蘭冥も微笑み返した。

「行つてくるわね、ダメなメガネ男、略してダメオ」

「つて、長谷川さんの一の舞はいやだアアアー！」

銀時も、万事屋の階段の下の道路から新八に呼びかける。

「約束どおり、お前は来週から『ハイパー』ツツ『ミメガネキャラ
だぞーーー！』

「ええええええ！ーーー？」

梅雨空には、晴れ間がさしあじめていた。

美人ってただ立ってるだけでいいよね（3）（後書き）

新八がかわいそうですね・・・。

ていうか皆さん、大丈夫ですか？

私のこの文章で、状況伝わりますかね・・・。

第一訓 廃工場は無法者のたまご場（一）（前書き）

冬休みですからね。
大量に書けます。

それと、昨日トリビア見た方いますか？
かりんとうを洗面器の水につけるやつ。あれ、見てから私やつてみ
たんですよ。
で、今朝見たら・・・・・・

キヤー～／＼（。 。 ＼）

第一訓 廃工場は無法者のたまり場（1）

万事屋を出た蘭冥は、銀時と神楽に話しかけた。

「これ。……弟、俊太郎の写真なんだけど。1年前の」

見せられたぼろぼろの紙には、若い　おそらく10代後半の、おとなしそうな少年が白黒で写っていた。

「んん？」

紙を覗きこんだ2人は一瞬黙り込み……それから大きく吹き出した。

「な、何ですかアンタの弟さん。ストレートパーマかけた日村？」「ありえねー、この顔あり得ないアル！」

100年に一度かと思われるような不細工なその顔に、神楽が手を叩いて大爆笑する。銀時も苦しそうにみぞおちを押さえ、蘭冥はといつと、

「私の弟を侮辱する気！？……やつぱりあなたたちに頼んだ私がバカだつたわ、もういい、死ぬ！」

と涙ながらに叫んだ。

「オイ、悪かった、やめろって」

銀時があわてるも、蘭冥は聞く耳を持たない。

「止めないで！死ぬんだから！」

言つなり彼女は、ズボンのポケットに手を差し入れ……。

「だから、お前はどんだけ刃物持つてんだ！」

「いや……違つみたまう銀ちゃん。蘭ねーちゃん、バナナ出しただけアル」

「神楽ちゃん、食べる？」

「何でバナナ！？それはアレか、バナナ ンとかけてるのか？つか自分も弟がブサメンだつて認めてるんじゃねーか！」

3人の繰り出す意味不明の芝居に、周囲の人は好奇と呆れの視線を浴びせている。

「もういい、恥ずかしい。……行くぞ」

歩きながら、「それでね」と蘭冥は話を続ける。

「弟の行きそうなところ、手当たりしだいつぶしてくしか方法はないと想うんだけど……」

「なるほどな。で、心当たりは？」

銀時がたずねると、蘭冥は腕を組んで少しうなつた。

「つーん……数ヶ月くらい前から、髪の毛が金色になつてたり、体中に小さな穴を開けて宝石みたいなのを引っ掛けたりね。家に帰つてくると青あざだらけだったり、あ、そりいえば家のお金が無くなつてたわ」

「……」

銀時と神楽が、途方にくれて顔を見合わせるが、蘭冥は気づいていない。

「きっと、あの子は優しい子だから…家のお金は募金でもしたんでしょ?」

「いや…アンタの弟さんね、これ俺が言うのもなんだけどさ、やから始まってキーで終わって、間にンがある的な何かじゃないの?」

銀時がやんわりと突っ込むも、

「え? そんなはずはないわ、あの子に限つて。宝石はきっと、自分がシヨーケースになつて売り歩いてたんだと思うし、お天道様をおぎすぎたから髪の毛が金色なのね」

と、蘭冥は瞳を潤ませる。

「ダメだこの人…客観的に物事見てないよ。髪染めたとかピアスとか、認めたがつてないよ!」

銀時が小声で神楽にささやく。神楽もささやき返した。

「でも、どうしますリーダー。ヤン キーだとすると、ドレをあたればいいアルか」

「そうだな、だつたら立体駐車場とか廃工場とか、ゴミ箱とか。… つーかまずお前は伏せ字の正しい使い方を学べ」

銀時が神楽のこめかみをぐりぐりし、怒った彼女に腕を噛み付かれたところで、蘭冥がぴたりと立ち止まつた。

「…………」

鼻をくくんさせ、空気を吸い込む蘭冥。

「匂うつて何が。加齢臭？」

「つりん…弟の匂い」

蘭冥の瞳^{ひとみ}が、きらりと輝いた。それから機械的な声で言つ。

「前方728・61メートル先、俊太郎発見」

「いや、何なのアンタ。鼻ビゲーション?」

「つづづく、つかみにくいキャラアル」

銀時と神楽がじぞつて毒舌を吐くが、蘭冥は気にしない。

「分かるわ。弟が…弟がいる…」

「何でだよ。蘭冥、お前スーパーイヤサイ人なの?スパイラーマンな
の?」

「違つけど、行くわよ…」

ドビュウウウウン!

蘭冥が、心臓を患つているとは思えない速さで前方に突進していく。

「あ、待つてヨ蘭ねーちゃん!」

「待てヒヒヒヒ…」

*

新ハは、万事屋でボーッとしていた。

何しろ、やることがないのだ。

自宅の道場に戻ろうかとも思ったが、万事屋を留守にしたことが
ばれたらあとで大変な目にあうのは分かりきっている。

「まあ…でも、今日…」

言いながら、彼は二三歳とばかりにテレビをつけた。

普段はチャンネル権を銀時と神楽に取られてしまつたのだが、今日は特別。邪魔する者どもはどこにもいない。

「えーと、この時間は…お通ちゃんの特番…」

チャンネルを大江戸テレビに変えると、流れてくる軽やかな歌声
が傷ついた新ハの心を癒していく。

『チョメ！ チョメチョメチョメ公～！ ポリ！ ポリポリポリポリく～
らえ～』

「いやつほう！」

その時、画面上部のテロップに、ニュース速報が流れた。画面
を食い入るように見詰めていた新ハが、その内容に目を見開く。

「……何だつて…？」

第一訓 廃工場は無法者のたまご場（一）（後書き）

あーあ・・・

かりんといひのひつ、やるんじやなかつた。

おかげで今日は、食欲減退です（苦笑）

朝つぱらからあんなの見たんじや、しかたないですよね。

廃工場は無法者のたまり場（2）（前書き）

いやー

今日、焼肉行つてきましたんですよ。

ユッケ・・・なかつた（泣）

その分、カルビをたらふく食つてやつました。

お腹が痛いです。

廃工場は無法者のたまり場（2）

「…………」

銀時たちが到着したのは、大きな工場の入り口の前。見たところあちこちがさびれて、とつくにラインは停止されるようだが、中から人の気配がある。そろりと覗くと、田つきの悪い男たちが幾人か、刀を持って警備に当たっていた。

「オイオイ、何だこりは。ヤンキーじゃが、攘夷浪士の巣窟じゃねーか」

「蘭ねーちゃん、どうするアルか」

「えっと……」

蘭冥は少し考え込み、それからすつと立ち上がって工場の扉を押し開けた。

「あのー、すいません。私、竹中蘭冥という者ですが、ここに竹中俊太郎って人いない?私の弟なんだけど」

ものすじく危険な」としている割に、けろりとしている蘭冥。

「あっ、馬鹿!」

銀時が彼女を止めようとするも、時すでに遅し。

「ああ?たった3人でここに乗り込んでくるたあ、いい度胸じゃねーか」

浪士たちが卑しい笑いを浮かべながら立ち上がり、3の方へ向かってくる。それぞれ、白くきらめく刀を携えて……。

体格のいい、リーダーらしき男がゆっくりと前に進み出た。

「俊太郎な。アイツは俺らが監禁してるぜ。……俺らの仲間と喧嘩やらかしたからなア……」

ねちつこに猫撫で声だ。

「つ……」

「工場の3階だ。後で連れてつてやるよ。……ただし、テメーら全員、物言わぬ屍にしてからな。本拠地の場所を知られたんじゃ仕方ねえ……。あーあ、俊太郎の奴、姉の死体を見たらどんな顔するんだろうな?」

「何ですか? そのサディスティックな趣味。ここ、イメクラじゃないんですけど」

「イメクラでも死体は扱わねーよ、白髪」

「つるせー奴だぜ……」

銀時がにらみ付けると、

「殺れ! ! !」

リーダーが刀を振り上げ、同士に命令した。

工場の奥から、次々と浪士たちが押し寄せ、3人を取り囲む。

銀時、神楽、そして蘭冥に向けられた刃が光った。

「うおおおおおおつつつ……」

雄たけびとともに銀時は木刀を抜き、前方にいる5人の浪士の刀を薙ぎ払った。

「ぐあつ！」

「何てこづってんだ！野良犬1匹に小娘2人、倒すのに時間などかかるまい」

「やあああああ！」

右から、左から、攻撃はとまらない。

神楽は傘で刀を受け止め、相手がひるんだ隙に蹴り上げる。が、即座に別の浪士が前に立ちふさがる。銀時はそのみぞおちにこぶしをめり込ませた。

「蘭冥！俺らのことはいいから、今のつちに行け！！」

「でも……」

「行くんだ！」

立ち止まる蘭冥をかばうように向こうに押しやり、銀時は倒れた浪士の刀を抜き取った。彼を後ろから狙つた別の浪士の肩は、神楽に撃ち抜かれる。

「がはあ！」

飛び散る赤。

蘭冥が工場奥の階段を駆け上がり、姿を消したのと同時に、銀時は浪士を3人斬った。

「大丈夫か神楽！」

「こんなカスども……私だつてすぐ片付けるアル！」

「そうか……」

一瞬だけ注意があろうかになつたその隙に、彼の背中に二本の刀がせまつた。

着物が裂け、血が滲みでる。

「チツ」

振り返りざまに、彼は自分を斬つた浪士の腕を落とした。

「テメーらー やるなんならやれやアア！……！」

銀時が吠える。

「よし、野郎どもー殺つちまえエエエーーー！」

暗く湿つた工場内に、叫び声と刀のぶつかる音だけがしばらく響いた。

しかし 3分も経つたころには、それらはすべて静まり返つていた。

「はあ……はは……はあ……」

「銀……ちや……」

あとに残つたのは血の海に沈み込んだ浪士たちと、背中合わせに肩を寄せ合う侍と少女のみ。

「行くか神楽……俊太郎のいる……3階に」

*

「ヤバい……僕、どうすれば……ー！」

万事屋に一人残された新八は、焦つたように周りを見渡した。速報の内容がいまだに信じられないくらい、脳内はパニック状態に陥っている。けれど、ここで冷静に考えなければ、仲間の命にかかるのだ。

「このままじゃ、銀さんと神楽ちゃんが危ない……」

刀ならある。今から加勢に行くべきか？間に合うだろ？いや、それより、もっと確実な手段を取つたほうが……。

「ひつなつたら……」

新八は刀を引っつかむと、草履を履くのも忘れて、弾丸のような

速さで表に飛び出していった。

廃工場は無法者のたまり場（2）（後書き）

えつと

いくつか感想をいただいてるんですけど（まだ忙しくて返信できていません…こずれちゃんとします）、

速報を見た新ハの反応について、
一体、何が起ったんですかーと
続き待つてますよーと。

残念ながら、まだ明かされません。
次回かなあ…分かるとしたら。

お楽しみに。

廃工場は無法者のたまり場（3）（前書き）

CSで正月前、銀魂一挙放送やってましたよね。あれの録画たまつてたんで、吉原編を見ました。

劇場版になつたのは紅桜編ですけど、私は吉原編のほうが好きです。いや紅桜編ももちろん好きですけど。

吉原編はなんか神二てます。

ストーリーもグラフィックもいいけど、BGMも神だ。心の奥がざわざわざわざわ…ってなって

な感じになります。

しかも何と言つても、晴太の背負つてゐる運命が銀S（ry

これ以上書くと收拾がつかなくなるので・・・自主規制します。

廃工場は無法者のたまり場（3）

銀時と神楽は、足元に倒れた浪士たちをよけながら、3階へと走る。途中で生き残りが何度も彼らの目の前を阻んだが、銀時はわき目も振らずに木刀を振るいながら前へと突き進んだ。

そして……。

「蘭冥……」

「蘭ねーちゃん……」

3階で、銀時と神楽が目にしたもの。それは、傷ひとつない蘭冥と俊太郎だった。2人とも、うれしそうに笑っている。

「よかつた…無事だつたのか」

「ええ。そちらは?」

「見てのとおりさ。ちよつとやうれちまつたが

銀時は苦笑しながら、「でも、まあ依頼は果たせたんだし」と言う。

「ついでに連中もみんな始末した。あとで真選組に突き出しあ、金もせしめられる」

「真選組に、ねえ……」

蘭冥がつぶやく。その口調がまるで銀時を鼻で笑っているようだつたので、彼は怪訝そうな顔をした。

「蘭冥……？」

「いいじゃない。それであなたたち、貧乏暮らしから抜け出せるんでしょ？まあ……」

彼女と弟がいるところよりも、もっと奥。その暗闇の中から、こちらを凝視している殺氣立った目がいくつも現れた。

「……生きてここから帰れれば、だけどね」

蘭冥は低く笑いながら、俊太郎が差し出した刀を取った。

「さすが、白夜叉と呼ばれた男。強いじゃないの」

冷たい瞳。残忍にほくそえむ唇。
それはまるで別人だった。

「お前…まさか！」

銀時の瞳孔が開く。蘭冥はそれを見て、面白そうに声を上げた。

「実際会つてみてびっくりしたわ。あなたのどこが夜叉だつていうの？弟に会うだの心臓が悪いだの、私の芝居を見抜けないなんて丈夫かしらと心配したけど……腕はなまつていないう。十分、使い物になるわ」

「どうこう」とだー。

銀時が、静かに凄みを利かせた。そして蘭冥をにらんだまま、右手をゆっくりと、腰の刀の柄に滑らせる。

「まあ、そう慌てないでよ。今すぐ殺すだなんて、言つてないでしょ？？」

「…何をする気だ」

「私たち　天人全排除を掲げる攘夷集団、白狐とともに、戦いなさい」

蘭冥が、表情のない目で彼を見据えながら、命令した。

「さつきの雑魚どもはね、私の手下なんだけど……結局は捨て駒つてところかしら。あなたの実力、試させていただいたわ。ここから全部見てたのよ、あいつらを全部倒してしまつところ」

「……」

銀時がぎりりと歯を食いしばった。

「」の女に振り回されていた自分自身に、どうしようもなく腹が立

つて いる。

「ふふ……ずっと欲しかったわ、宇宙での戦いに慣れた人がね。知ってる？鬼兵隊の高杉様から聞いたんだけど、刀竜星が地球に攻め込む計画を立ててるらしいのよ。だから、やられる前に私たちに向こうを侵略するってわけ。刀竜星には、金塊が眠ってるらしいしね。あなたの力が不可欠なんだけど、どう？一緒に戦わない？」

「……高杉？」

銀時が鋭い目で訊いた。蘭冥はうなづく。

「そう。彼が、あなたの存在を私たちに紹介したのよ

「……」

彼はうつむいた。

これは絶対、高杉の罠だ。

しかし、仮に罠だとして、俺に出来るることは一体……？

「銀ちゃん……」

神楽が不安そうに名前を呼んだ。
銀時の口元が、ふっとゆるむ。

「願い下げだな」

蘭冥が眉を寄せた。

「そんなこと言つて、あなた、今ここで無駄死にする気？」

「無駄死にだア？」

銀時の眼に、小さく光が宿つた。

「俺らは死なねエよ……たつた1人の男の実力をはかるために仲間を犠牲にしたり……金塊目当てに他の星を侵略しようとするような組織にや、殺されたりしねエ！」

「なるほどね……」

蘭冥が、氷の微笑みを浮かべた。

「あの男と、隣の娘。…始末なさい」

工場奥に潜んでいた人だからが、いっせいに動き出した。

「つーー！」

銀時が刀を構え、無数の浪士に突進していく。

「神楽、逃げろ！」

「銀ちゃん、無理ネ！」

「馬鹿！早く、今のうちに逃げるんだ！..」

「だつて！」

見れば、神楽もすでに取り囲まれてしまつてゐる。額に汗を浮かべながら、必死に攻撃をかわしている最中だ。

「アラム」

銀時の左肩が、血を吹いた。それでも、彼は止まらぬ速さで抜刀しては相手を斬り捨っていく。

「ぐああー！」

返り血で真っ赤に染まつた着物を振り乱しながら、敵中に突つ込む銀時。早くも、白夜叉の面影がちらつき始めている。

「お前らー！早くやつちまこなー。」
「おれはやられねーって…言つてんだがー…。」

次から次へと敵をさばいていく彼の姿は、とても人間とは思えないほど。

神楽も浪士たちの間を縫うように舞いながら、傘に火を吹かせている。

しかし 多勢に無勢。

先ほどの戦いですでに疲労がたまっている2人にとって、幾十人の人を相手取るのは不可能に近かつた。

少しづつ、少しづつ、上へと追い詰められていく。

「ねえ…白夜叉さん、私がいいこと教えてあげようか」

蘭冥がピストルを構えながら、小首をかしげた。

「いやいやあ、アンタさあ、俺の好みなんだよね。どう? つまんねエ喧嘩なんざやめて、あとで俺といいことしない?」

「そんなこと言つて、ホントは余裕なんてないくせに。どこまで持つかしらね?」

ピストルの銃口が火を噴いた。即座に弾丸を刀で叩き落す銀時。

「私が、天人を排除しようとしてる理由…知りたい?」

「くつ…」

銀時と神楽は、すでに屋上まで出てしまっている。もはや戻れない。

晴れ渡る空の下、斬つ合には最高潮に達している。

廃工場は無法者のたまり場（3）（後書き）

あらー

蘭冥さんの化けの皮がはがれちゃいました。
しかも銀さん、結構ケガしてます。

でもね、蘭冥さん、実は悪い人じやないんですよ。
いや、十分悪役ですけど、根は悪い人じやないんですよ。
・・・と信じたい。

廃工場は無法者のたまり場（4）（前書き）

注意書きですっ！！

この章は、人によつてはですけど、

銀神・「沖神みたいに感じるかもしません。

（実際は違います）

やつぱりシリアルな時は、いがみ合つてる人達でも協力しなきゃいけないですよね。

ですから、これから先も

銀妙・銀新・土沖・土銀・新神・近沖・銀沖

みたいなのが多発すると思います。他のも出でくるかも。
でも、これはあくまで「それっぽい」だけですから、
実際はただの「絆」ということにしてやってください。

廃工場は無法者のたまり場（4）

「あれは……何ヶ月前のことだったかしら……」

乱闘の中、蘭冥の声だけがいやに鮮明に耳に入つてくる。

「私のね、たつた1人の友達が、天人に殺されたの。……吉原で」

銀時と神楽はその声を背に、襲い掛かる敵からひたすら身を守っている。

「たつた1人の、大切な親友だったのに。私と同じく、自警団『百華』の一員で、とても強くて、頭もよくて。自衛の親友だったのに、殺されてしまったのよ」

「お前も百華だったのか。どうりで強いはずだぜ……。それで？」

銀時が、浪士を1人めつた斬りにしながら問う。

「ちょうど、その女の子……神楽ちゃんみたいに青い目で、長いオレンジ色の髪を後ろで三つ編みにして、中華服を着た色白の若い男に殺されたの。私の目の前でね」

「…………」

瞬時、神楽の顔に戦慄が走った。銀時も、それを見逃さなかつた。

「おこ……！」

ガシャン。

神楽が、表情をこわばらせたまま、傘を取り落とした。すると、それを見計らつたかのように、蘭冥の銃口がまっすぐ神楽に向かうれる。

「以来、私は百華をやめて、天人と戦つことにしたってわけ。分かった？」

神楽が、怯えたようすでじりじりと後ずさりする。蘭冥の唇が、めくれ上がった。

「死になさい」

澄んだ青空に、銃声が一発、一発。

「私……死ぬ、の……？」

さつと、視界が暗転する。

しかし、手足の感覚はまだはっきりしている。

「……あれ……」

そう、つぶやいた時だった。突然、視界を覆っていた暗闇が、鮮やかな赤に変化した。

生暖かい液体が、神楽の服を濡らしていく。
少しずつ、少しずつ、染み込んでいく……。

「え……」

太陽にきらめく銀色。
優しい瞳。

けれどその人の口からは、自分の名前ではなく、泡立った血が吹きこぼれた。

そう 銀時自らが盾となり、神楽を守つたのだ。脇腹と胸に、弾を受けて。

「銀ちゃんつづ……！」

現状を認識した神楽が、悲鳴を上げた。

そして、聞きなれた声たちが屋上の階段を駆け上がりてくるのも、それと同時だつた。

「銀さん、神楽ちゃん！－！」

「誰だつ……？」

浪士たちは誰もがうらに反応し、銀時と神楽の両面の敵はいなくなつた。

「万事屋ア！」

「旦那！チャイナ！」

神楽の目に飛び込んできたのは、黒い人だかり。刀。バズーカ。
そして

「新八……」

神楽は、ほうほうと息をついた。

「やつてくれたな……ぱつつかん……」

銀時は目を細めて新八を見ながら、力の入らない手で神楽の頭を
かき撫でた。

「新八……神楽……生きて、戻れ……」

念じるよつに、声を喉の奥から振り絞つてから、彼は軽くなる体
に身を任せて目を閉じた。神楽が、はつと目を見開く。

「銀ちゃん……やだ、銀ちゃん 嫌だ、嫌だ、嫌だ……」

神楽は激しく首を振り、泣きわめく。
そして太陽は5月といえど、心身ともに疲れきった神楽をじりじりと照らしつける……。

「嫌アル…」

黙つてなどいられない。
立つて、武器を手にして、戦いたい。
あいつらを、許すわけにはいかない!!

「く……う…」

だが、猛る心とは裏腹に、日差しにすっかり弱つた手足はぴくりとも動いてくれない。

「そんな…」

ああ、もうどうなつてもいい。
身動きを取れないがために全てをあきらめ、弱気になりかけた神
楽を、黒い腕がかかえ上げた。

「あつ……ー?」

嫌だ、銀ちゃんから、引寄せられる…！

「銀ちゃん…」

神楽が銀時に向かって手を伸ばすと、頭上から乱暴な言葉が降ってきた。

「黙れや。この状況で旦那のことあーだこーだ心配したって、てめーが死ぬだけだろうが」

「お前……？」

廃工場は無法者のたまり場（4）（後書き）

そういえば、前書きで思い出したんですけど。

私の一番好きなCPはなんでしょう？

- C Hリジャ s ((殴
- B 沖神
- A 銀妙

答えはAです。

銀妙。これは、実際脈アリじゃないか??と思つております。ですから大好物なんですけど、残念ながら私にはオトナの恋は書けない。

だから読むほう専門です。

Bの沖神ですが

これも好きです。でも、本編見てる限りありえないんじゃないかなーと。

だけど、一番書きやすいし、実際くつつけばナイスカップルだと思うので、2番目に好きって感じでしょうか。

このやつは・・・

この世に存在しないと思います。

長文失礼しました。

第三訓 性格悪い子供の保護者は親離れしそうでもできない（一）（前書き）

第三訓突入です。
わーい！！

そのまえに、断じて言い切ります。

前回のあれは沖神じゃないですからねーー！

さて、時間は少し戻りまして、今回は現場に向かう新八のシーン。
どうや。

第三訓 性格悪い子供の保護者は親離れしようともできない（一）

土方の後について、真選組の隊士とともに工場の階段を駆ける新八。

「てめーらアア！この先に、指名手配の過激派攘夷浪士グループがいるはずだ！リーダーの竹中蘭冥も含めて、誰一人逃すんじゃないぞ！！」

土方が、士氣をかき立てながら屋上に躍り出た。新八がそれに続き、後ろから沖田、山崎、他の隊士も進み出る。

「……っ！！」

新八が目にした光景・それは、見たところ百人近い敵。

そしてその中心には、神楽を抱いて真っ赤に染まつた銀時。

舌先までかかつた悲鳴を、彼はぐつと飲み込んだ。

「銀さん、神楽ちゃん！！」

「万事屋ア！！」

「旦那！チャイナ！」

嘘だと、思いたかつた。

この屋上に広がる惨事、いつたいどひ受け止めればいいのだろう。

「行け――――――！」

「うおおおおおお――！」

隊士たちがめいめいに刀を握り締め、浪士の集団の中に飛び込んでいく。しかし新八は、心が混乱の海に沈みきつたまま、いつこうに浮かび上がってこない。何をどうすればいいか分からず、いやな汗をかいたまま棒のよう立ち廻っていた。すぐそこで起こっている乱鬪も、まるで目に入らない。

「銀……さん……」

その時新八は、銀時が「こちらを見て口を動かしていく」と云ついた。

「何だつて？」

新八は田を凝らした。唇の動きを、注意して読み取る。

「……いきて……もどれ」

彼の胸の中を、電流が駆け巡った。

脳裏にフリッシュバックしたのは、紅桜の事件。

『やればできる子だと、思つてたよ』

銀時は穏やかに笑いながら、そつと語つてはいなかつたが。

「…僕は」

刀の柄を強く握り、抜刀。

「やる……」

地面を大きくけり、彼は心の勢いだけで高く飛び上がる。

「うおおおおおおおつ…………」

僕には銀さんがない。神楽ちゃんがない。土方さんも沖田さんもいる。

「人じゃない。

やれば、できるーー！」

「おい、何だあの坊主ーー！」

浪士の1人が、宙を指差した。

「白夜叉のところには、あんなのもいたのかーー？」

「やべーぞ、あの目ーー！」

新八に気づいた2、3人が刀に手をかける。
しかしその時にはすでに、彼らは音もなくばつたりと倒れていた。
新八の、たった一撃によつて。

「来いやアアーー！」

頭では何も考へないで、ただ心の導くまま、彼は剣を振るう。
敵を倒すたび、自分も斬られた。
頬を。肩を。足を。腕を。

……でも、僕は負けない！！

新八は自分自身にそう誓つて、刀を大きく振りかぶつた。

第二訓 性格悪い子供の保護者は親離れしちゃひでもない（一）（後書き）

何でカツコいいのか。

新ハのくせに。

メガネのくせに。

何で強いのか。

童貞のくせに・・・。

性格悪い子供の保護者は親離れしそうな子でもない（～）（前書き）

はい。

えーと緊急地震速報を耳「♪♪」してキーボードで弾いたり
母が驚いて風呂から飛び出きましたよーっと。

一応タオルは持つてたんですけどね。

銀魂並みの出来事です ～

新ハのツツ「ミ」がきいてみたい^ ^

性格悪い子供の保護者は親離れしよつてもできない（2）

その頃、土方は一度に5人を敵に回しながら、相手の隙をつかがつていた。

「……っ…」

敵から田を逸らさないようこじながら、背後の沖田に呼びかける。

「総悟」

「何ですかイ」

いつもと変わらぬトーンの返事が返ってくる。そのこと、彼は少しだけ安心した。

「お前、チャイナを連れて逃げろ

「…は！？」

「いいか…この数の敵の中を、人をかかえながら突っ切れるような化け物、テメーしかいねえ」

低く、そう命じる。だが、相手が沖田だけに、そつまく事は進まない。

「俺に、チャイナ娘をお姫様抱っこしろって言つんですかイ？」

明らかに不満そうな声。土方は舌打ちした。

「四五の言つてゐる場合じゃねーだろーお前しかいねーんだよー…

「嫌ですかア」

即答。

「……副長命令だぞ」

「聞けねーな」

「切腹するか」「リハ」

後ろで、沖田が黙つこくつた。そしてじぱりく、土方と沖田の戦
鬪比べ。

数秒がたつた。

「……給料上げるよ

沖田が、神楽のほうに向かって走つていへく氣配がする。

「はあ……」

「これで良かつたのだ、と土方は思った。

「これで、良かった。

2人の若い命を、守るにじがでできるのだから

。

「おーい、チャイナ」

そんな土方の思惑にまつたく気づかぬまま、沖田は神楽の前に膝をついた。もとも、意識は銀時のほうに向いている。

「旦那、アンタの家族は、俺が守る。こんな『リラ娘、癪だがな…。その分、あとでたっぷり礼をくだせ』……絶対です。」

小さく頭を下げた後、沖田は周囲を警戒しながら神楽を抱き上げた。

「銀ちゃん…！」

弱々しく伸びる手。

その仕草が　姉との別れを惜しむ弱い弟の姿に重なり、彼の苛立ちはさらにもつった。

「黙れや。この状況で旦那のことあーだーだ心配したって、てめーが死ぬだけだろうが」

吐き捨てるよつこわづ言い、彼は神楽とともに階段を降りていった。

途中、「N女の体に気やすく触るなー」だの「変態痴漢男」だの「死ねドリ」だと、あつとあらわる暴言を浴びせられたが、ともかく無事に工場を脱出。

「あーあ、やっと出れた」

彼は日光が苦手な神楽を木陰に寝かせた。というか、放置した。

「さてと、俺は戻るとするか」

上着を脱ぎ捨てる。

「さつさと行けよカス」

「カスで結構、クズ娘」

沖田は振り返ることなく、再び工場に向かつてずかずかと歩いていく。

「……」

神楽はしばらく何も言わずに彼を見ていたが、やがてその背中にためらいがちに声をかけた。

性格悪い子供の保護者は親離れしきりでもない（2）（後書き）

ちょっと急いで改行なしです。すみません。

（08.01.12編集 第3訓を3パートに分割）
適当に絵を書きました。

蘭冥のキャラ絵です。

下手ですみません・・・・。

> . 138599 — 3606 <

色氣も何もないです。

性格悪い子供の保護者は親離れしそうでもできない（3）（前書き）

なんか、なんとなく、第3訓を分割してみた私。

昨日第10話を読んでくださった方は、全く同じ内容が同じに出て
る感じです。

手抜きの投稿だ！

なんて言わないでください。

最後まで読んでくださると、私の下手すぎる絵が載つてますので・・

・（笑）

性格悪い子供の保護者は親離れしそうでもない（3）

「サド…銀ちゃん、大丈夫かな…」

「あア？」

沖田が、面倒くさそうに神楽を見る。何言つてんだコイツ、厄介な娘だ……と。

いや 違う。

「何言つてんだお前…変な」と言つなよ、縁起でもねエ……

面倒くさいのではない。

神楽のその言葉で、余計に不安感が増したのだった。ひょっとしたら、人生で得た3人目の悪友を失つてしまふかもしないという、かすかで大きな不安が。

銀時が強いことは、もちろん知っている。

しかし、体に2箇所、あんな弾を受けたりしたら……。

唇を噛んだ。

「もう一度言つてみやがれ。ぶつ殺すぞチャイ
ドオオオオオン。」

その時、轟音が響いた。草木が揺れる。
鼻孔を刺激するのは、火薬のにおい。

「あつ……！」

屋上が、火に包まれていた。先ほどまで自分のいたところから、黒い煙が上がっている。空を覆い尽くすほどに濃い煙が、パチパチと火花をはらんで、高く高く。

「土方、あの野郎……」

沖田は、土方が先ほどそこまでして自分と神楽を避難させようとした理由を理解した。

次々と、沸くように出てくる大量の敵。
殺されていく隊士。

これではらちが明かないと思った彼は、爆弾を使うことにしたのだろう。

「馬鹿かアイツ……あの、大馬鹿の副長めが……」

きっと、隊士も何人か巻き添えを食らったはずだ。土方本人だって怪我をしたかもしれない。無事では済まなかつたかもしれない。

何を思つて、俺を守りつとしたのか

。

「馬鹿だ……馬鹿だ……」

沖田は脱力し、地面に座り込んだ。

まだ、陽が落ちる気配はない。

性格悪い子供の保護者は親離れしありができない（3）（後書き）

まったく、テスト前って時に、私は何をしてるんでしょ。いい加減腹が立ってきます

さすがに、明日あたりが最後の更新になるかもしれませんね・・・毎日はキツい。

受験終わったら、ほちほち白夜叉さんにも活躍してもらおうと思つし、そういうえば旦那様を失つた神楽の苦惱についても書かなければならぬ。（別の小説）

あ、それと、これが前書きで書いてた下手すぎる絵です。

> 138666 - 3606 <

何やってんだコイツらは。
体の位置関係もおかしいし。

御目汚し誠に失礼致しました・・・。

第四訓 一富士一鷹三なすびなんて見たijoある奴こるの? (一) (前編)

なんか、今日は一段と閲覧者数が多かったなあ・・・

何があつたんだろ。

第四訓 一富士一鷹三なすびなんて見たじとある奴こるの? (一)

「うう…イテテ…」

銀時は田を覚ました。

頭に、石が乗っているような重い痛み。

「……ん……何だ」

半身を起し、辺りを見渡す。

万事屋、ではない。

病院、でもない。

もちろん、工場でもない。

見たことのない灰色の景色が、一面に広がっていた。

…いや、厳密に言えば、万事屋を始めてからといつもの一度も田にしたことのない景色が。

「…………？」

戦場。

その言葉が思い当たった。

がれきの山、くすんだ空、焼けた木、乾いた風

記憶の奥底に

あるそれと、見事に合致している。

だが、その割りに人がいない。

どこにも、いない。

声すらしないのだ。

「地獄……なのか。俺は、地獄にいるのか……」

彼は地面を見つめた。灰がうすく積もっている。
思わず咳き込んだ。

「地獄じゃねーよ」

不意に声がした。
聞き覚えのある声だつた。

「！？」

反射的に顔を上げる。男が一人、目の前に立っていた。

「高杉」

「ようやく会えたな、銀時」

紫の着物が、血のにおいの風になびいている。煙管から吐き出されていくかすかな煙は、いざこともなく消えていった。

「いつの間に…」

「いつって」

高杉が、くつくつと笑った。

「これが、現実って奴さ。俺の求め続けていた理想…お前の避け続けていた未来…それが、現実になつただけだ」

まるでお天氣の話でもしているかのように、その口調に重みは感じられない。

「お前の護りたかったモノは、こんなにもろく崩れるようなおもちゃだったのか…残念だ。大事にしていたおもちゃを失くして、ただ泣く赤子。今のお前は、それくらい無力な存在だ」

高杉はそれだけ言つと口角をきゅっとつり上げ、そのままきびすを返した。

「おい…待て…！」

追いかけようとする。

が、金縛りにあつたように、体の自由が利かない。

「高杉！ 戻れ……！」

もじれ…じれ…じれ…じれ…れ。

銀時の声は、廃墟となつたビルに反響するばかりで、冷酷なかつての戦友に届いてなどいない。

高杉の後ろ姿が、小さくなつていく。

どんどん、どんどん、視界から消えていく。

そして、それと比例するかのように、体は力を取り戻し 。

「何でだよ…何が起こつたつてんだ」

高杉が完全に見えなくなつた頃、銀時はよつやく立ち上がつた。

「ああ……」

あらためて、冷静に周りを見てみる。

すると、さうきまで田にも入らなかつたものに気がついた。

自分の足元にある、物体。

「お妙……？」

そう、それは紛れもなく、妙だつた。

彼の右隣に、薙刀とともに、血にまみれた首だけが転がつて。

「お妙……？」

第四講　一富士一鷹三なすびなんて見たじとある奴こるの？（一）（後書き）

ダメだよ銀さん。

あんな大けがしたからわあ・・・かぶき町、滅ぼされやつたじゃ
ん・・・。

つて感じですかね。

さて

明日から新学期だ。
で、いきなりテストだ。

いつそ、銀魂の世界に逃げたいです。W

— 鷹三がすばらしく見たりとある奴である。(2) (福井)

なんかいろいろあります

今日も改行なしだす。

「めんなさい。

注意！

描写が残酷です。

——富士——鷹三なすびなんて見たことある奴いるの？（2）

心臓がばくばくする。

口から今にも飛び出るのではないかと思ひはじ、乱暴に胸板を打つている。

耳の奥で、わーっと血液が逆流する音がした。

「嘘だろ……！」

血走った目で左隣を見る。

そこには、四肢を失った新ハガいた。

上半身だけの神楽がいた。

彼らだけではない……がれきに頭を碎かれたお登勢、全身がケロイド状態のキヤサリン、そして散っているのは桂の髪。屍となつた近藤の腕の中には、折れた刀を握り締めたままの沖田の遺体が眠るよう抱かれていて、すぐ隣で土方が静かに横たわっている。

自分の周りを埋め尽くしている、仲間の亡骸。

「嘘だ……嘘だ、嘘だ……」

自分がなぜこの状況で、ただ1人生き残っているのか。

答えは明白だった、だがそれを認めたくなかった。

「どうして……」

自分の護りたかったものが、大切なものが、跡形もなく壊されてしまった。無残に奪われてしまった。

「どうして……」

大怪我をして、今日この瞬間まで意識を失っていた俺のため、消えていった。

俺を守って、消えていった。

俺は何も守れなかつた。

俺は負けた。

俺は、1人だ。

「あ……ああ……」

報いだ。

弱かつた俺への、報いだ。

弱さゆえに、俺は1人になつた。

「新八神樂」

「ハラ」
「ハラ」

1人ざ、1人ざ、

「桂・近藤・土方・」

1人た 1人た

「...」

俺にとって一番大事な剣、一番大事な盾、一番大事な魂を、すべ

「何で？」

仲間の輪の中で、男は膝を折った。

遺体の数は、とてもその男の胸に抱ききれるほどではなかつた。男の顎を、熱い痰がしつづく。

— 鷹三がすばらしく見たいとある奴である（二）（後書き）

明日、時間があればまた編集しようかと思こます。

てか、銀さん泣こちやつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9221z/>

白夜叉再臨

2012年1月10日23時51分発行